

【論文概要】

# 自然暦に関する歴史民俗資料学的研究

—特に景観に指標を求めた自然暦に着目して—

歴史民俗資料学研究科歴史民俗資料学専攻

博士後期課程 3年

学籍番号 202070187

太田原 潤

従来の自然暦研究は事例の収集が中心であった。網羅的に様々な自然暦を集成した川口孫治郎や野本寛一にしても、雪形に特化した集成を行った岩科小一郎や田淵行男にしても、各地の事例を豊富に紹介してはいるものの、それを用いた分析や考察は十分になされてこなかった。

自然暦研究において事例の蓄積が重要であることは論を俟たないが、事例の蓄積の先に展開できる研究を行うことでこそ見えてくる自然暦の姿もあると考える。

本研究は、先行研究を踏まえつつもそれを乗り越え、いくつかの具体的な事例を多面的に分析することによって自然暦全般を再考し、その特質を明らかにすることを目指すものである。

自然暦総体を俯瞰すると、動植物などの生物に指標を求めた自然暦と、雪形などの景観に指標を求めた自然暦に大別することができるが、従来の研究においては前者に比重が置かれがちであった。それに対し、本研究は特に後者の景観に指標を求めた自然暦に注目し、それ加えることによって自然暦を包括的にとらえようとするものである。

まず、序章において先行研究を整理し、問題の所在を明確にした上で自然暦の概念を再整理する。その上で自然暦を分類し、その大別としての生物指標型自然暦と景観指標型自然暦の位置づけを示す。

次に景観指標型自然暦をさらに雪形で読む自然暦と太陽の出没点で読む自然暦に分け、前者を第Ⅰ部として第1章から第4章まで、後者を第Ⅱ部として第5章から第8章までを宛て、それぞれ4章を割いて具体的な事例を用いた考察を行う。これらの章では、事例の収集より、むしろ個々の事例を具体的に掘り下げることに努め、確認や検証に重点を置いたフィールドワークを行うことを重視して、筆者なりの視点から考察を行う。

さらに、第Ⅲ部では第9章から第11章までの3章を宛て、関連資料との比較から自然暦の機能を浮き彫りにする考察を行う。

最後に終章において全体を総括し、自然暦の特質を明らかにする

## 序章 先行研究と問題の所在

### 第Ⅰ部 景観指標型自然暦の諸相 1 ー雪形で読む自然暦の様相

第1章では、雪形そのものについての考察を行う。雪形という用語自体は現代の造語であるが、雪形に関する文や絵は近世から見られる。本章では次章以降で考察を行う前段の整理として、近世以来の雪形認識の変遷を捉えるとともに、雪形そのものの事例集成や、研究をまとめる。

第2章では、現代よりも自然暦に対する依存度が高いと考えられる近世において、雪形が具体的にどの程度利用されていたのかについて、青森県の八甲田山の事例をもとに考察する。近世の菅江真澄の記録を詳細に分析し、現代も見ることができる実際の雪形と比較することによって近世の実相に迫る。

第3章では、日本一雪形が多い山とされ、近世以来の雪形に関する記録が多く残る青森県の岩木山を事例に考察する。近世の雪形が現代まで伝承されている八甲田山とも比較し、岩木山の雪形の多様性と多義性を考える。

第4章では、民俗調査により、一定の範囲において雪形を見る山が多数存在する地域での考察を行う。具体的には長野県北信地方を例として、雪形を見る山と集落の関係や生業との関係などの分析を行う。また、併せて生物指標型自然暦と生業との関係も確認し、雪形との差や自然暦全体としての傾向を探る。

### 第Ⅱ部 景観指標型自然暦の諸相 2 ー太陽の運行で読む自然暦の様相

第5章では景観指標型自然暦の中における太陽の運行で読む自然暦の位置づけを示す。本章では、次章以降で考察を行うための前段としての先行研究や事例を整理し、歴史的な変遷についてもまとめる。

第6章では、太陽の運行で読む自然暦の具体的な事例として沖縄県久米島のウティダ石の考察を行う。ウティダ石は太陽の運行で読む自然暦の典型例であり、現代に残る遺構で検証可能な事例としても重要である。沖縄の文字暦導入は近世に入ってからであることから、文字暦以前の暦認識を知る手がかりともなる。

第7章では、太陽の運行で読む自然暦の古層を探るため、考古遺跡をもとに検討する。各時代を俯瞰した上で最古期となる縄文時代に注目し、青森県三内丸山遺跡や同県大森勝山遺跡を具体的な事例として分析し、こうした知識を獲得するに至った背景についても考える。

第8章では、太陽の運行で読む自然暦の痕跡として三重県二見浦の立石について考察する。縄文時代の遺跡に少なからず見られた太陽の運行で読む自然暦は、その後は徐々に不明確となるが、少ないながらも痕跡が残された事例として二見浦の立石について考察し、併せて痕跡が少なくなる背景についても考える。

ここまでは、具体的な事例を中心とした景観指標型自然暦についての考察となるが、続く

第9章から第11章では自然暦が果たした役割を浮き彫りにするための考察を行い、終章において全体を総括する。

### 第Ⅲ部 自然暦の機能

第9章では、農書との関係から自然暦を捉える。多くの雪形が採録されている岩木山麓の一带は水田地帯であり、近世の農書もいくつか残されている。自然暦は稲作との関係で語られることが多いが、実際に使われた農書への自然暦の記載の有無を確認し、自然暦の果たした役割を考える。

第10章では、絵暦との関係から自然暦を捉える。自然暦とともに稲作に結びついた素朴な暦の例として挙げられることもある絵暦(田山暦)を分析し、絵暦が稲作にどの程度必要とされるものなのか考察し、文字暦や自然暦とのかかわりの中から自然暦の果たした役割を考える。

第11章では、文字暦とこれまで見てきた自然暦を具体的に比較することにより、暦と生業、暦と信仰などについて考察し、文字暦との関係の中から自然暦の特質を捉える。

終章では本研究で見えてきた自然暦の特質をまとめた。

#### 1 自然暦の二面性

自然暦には相対的自然暦と絶対的自然暦があり、生物指標型自然暦全般や景観指標型自然暦の内の雪形で読む自然暦は前者で、太陽の出没点で読む自然暦は後者で捉えることができる。相対的自然暦はその関係性を維持しつつも場所による時期の違いや年毎の遅速があるが、絶対的自然暦は不変である。そのため、後者は日の特定も可能となる。文字暦を持たないがマツリを行うような社会においては重要な役割を果たしたものと思われる。

また、自然暦には在地性、即ちその場でのみ意味を持つものと、場所を越えて普遍性を持つものがある。絶対的自然暦は他者と共有可能でかつ、場所に拘束されずに認識できる特質を持つ。

他方、自然暦には個的要素と社会的要素も見られる。生物指標型自然暦、景観指標型自然暦双方に、他者とは共有せずとも自分だけがわかればいい自然暦と、他者と共有可能な自然暦がある。

#### 2 文字暦受容の背景としての自然暦

生物指標型自然暦も景観指標型自然暦もその起源は有史以前に遡るものと考えられるが、前者は記憶や記録によらなければ辿ることができないのに対し、後者は自然景観や遺構を手掛かりに辿ることができる。それにより、景観指標型自然暦の内の絶対的自然暦は検証可能なものとなり、古墳時代を越えて縄文時代まで遡ることが確認できる。宮田登は文字暦が受容された際に「節気の知識は容易に馴染むものだったらしい」としたが、それは文字暦導入最初期の古墳時代において、絶対的自然暦によって二至二分を把握することができており、そ

うした原初的な暦認識を媒介として理解することができたからと考えられる。

### 3 自然暦の現在

相対的自然暦は現代の生活の中にも残存する。雪形については文化資源的に変容を遂げながらも残り、生物指標型自然暦には新たに生み出されているものもある。一方、絶対的自然暦はほとんど失われ、痕跡をとどめる程度である。

### 4 自然暦の消長

自然暦の現在の姿を見ると、自然暦にも消長、変遷があったことがわかる。太陽暦の特質を持つ絶対的自然暦の方は早い段階から衰退の途にいたことになるが、これは文字暦、即ち太陰太陽暦である旧暦下にあっては其中的の太陽暦の要素の二十四節気はその役割が代替されたことによる。純粋な太陽暦の現行暦下ではそれがさらに日付に代替されて絶対的自然暦の存在意義が失われ、時刻制度や生活スタイルの変容もあり痕跡をとどめる程度になった。

### 5 課題と展望

本研究においては景観指標型自然暦を中心に考察を加えてきたが、太陽の出没点で読む自然暦についてはそもそも民俗調査の対象とされてこなかった経緯がある。現状においては事例の収集が困難である感は否めないが、さらに追及する必要がある。

また、本研究においては月や星（恒星）についてはあまり触れずにきた。月の盈虚は周年の周期とはなり得ないが、出没点の最北、最南に着目した周期性を重視した研究もあり、その見方の是非については再評価する必要がある。星の利用については既に聞き取り調査の集成もあることから、それを踏まえた研究も必要となる。

生物指標型自然暦については一見すると多くの事例が集成されているように感じられるが、聞き取りの際に農作業との関連が重視されてきた経緯がある。狩猟や採集との関係においては先行研究においてもあまり聞き取りがなされた形跡はない。山菜採りとの関係などに注目した聞き取りや、生業との関係以外の自然暦の活用例などについても事例を収集する必要がある。そうした研究も加えることで自然暦の全体像に近づくことができよう。